

子どもの問いから

特集

始まる学び

子ども自身が解決したいと思う「問い」があるとき、そこには、主体的な学びの姿があります。今号の特集では、輿水かおり先生（元玉川大学客員教授）へのインタビューを皮切りに、子どもの問いから始まる三つの実践をご紹介します。

教えて！

問いから始まる学び

どうすれば、子どもたちが問いをもてるようになるのでしょうか。



問いは、子ども自身の「なぜだろう」「確かめたい」「もっと深く考えたい」という自然な気持ちから生まれます。そうした子どもの意欲を

引き出す仕掛けを、用意してあげましょう。まずは、環境整備です。たとえば、学級にどんな本を用意しておけば、授業で子どもの関心を引き出せるかを考えます。また、

その単元の題材の実物や写真を見せることも、子どもの意欲が耕されます。

そのうえで、学習の初めには、教科書の単元の最初のページを使って、その教材でどんなことを学ぶのか、学習課題を確かめてから、それぞれが自分の問いをもつ活動へと導きます。

大切なのは、子どもに問いをもたせる前に、先生自身がよく教材研究をし、たくさんの問いをもっておくこと、その単元で、どんな力を身に付けさせたいかを考えておくことです。そうした学習のねらいを定め、たうえで、子どもたちがどんな言葉に立ち止まりそうか、立ち止まってほしいか、よくイメージしておきましょう。

子どもからたくさん
の問いが出たときは、
どうしたらよいでしょうか。



子どもが真剣に考えて出した問いに、価値のない問いはありません。どんな問いにも耳を傾けて、その解決方法を一緒に考えましょう。教材の読み間違いから出た問いならば、「どうしてそう思ったの」と理由をきき、教

室全体の理解の材料とします。書き手にきかないとわからないような問いは、教材文からだけではわからないこととして共有したうえで、発展課題としてとっておきましょう。そうして残った学習の柱となる問いを、追求していくとよいでしょう。

子どもたちが主体的に学ぶ姿の表出として、たくさんの問いが出ることを歓迎できるといいですね。

何年生くらいから、
どのような問いを
立てられるとよいのですか。



低学年のうちは、先生が問いかけて、一緒に考えるところから始めます。中学年では、子どもから出てきた問いを整理し、価値づけるようにしましょう。学習の中盤で扱う問いか、まとめの段階で扱う問いか、先生が交通整理をしながら進めます。高学年になったら、「why（なぜ）」の問いを子ども一人一人がもてるといいですね。

ただし、問いを立てることは、経験の積み重ねですから、学校・学級によって状況が違って当たり前です。焦らず、目の前の

子どもたちを見て進めましょう。

問い続ける子ども
を育てたいです。



子どもが問いを解決できたときの達成感や納得感を、先生が感動をもって認め、価値づけてあげましょう。そうすることで、子どもたちは問いをもつことの楽しさ、おもしろさを実感し、問い続けたいくなります。

疑問の種から生まれた根のある学びを、子どもたちとつくっていきましょう。

輿水かおり

広島県生まれ。元玉川大学客員教授。23年の教員生活の後、港区教育委員会指導主事、東京都教育庁主任指導主事、小学校校長、玉川大学客員教授等を務める。光村図書小学校『国語』教科書編集委員。



特集

子どもの問いから
始まる学び

